『パパの恋人』

蓮見瑠璃(10)
蓮見友仁(41・8・20)
長吉朔也(28)

蓮見恵理(31・8・20)
浜野真子(29)
井ノ瀬花(10)
広瀬一樹(10)
金田リーサ(10)
山田光太(10)

一樹の母(28)
リーサの母(32)
光太の母(38)
花の祖母(85)

○　蓮見家(マンション)・瑠璃の部屋(夜)
本や洋服などで少し散らかっている子供部屋。部屋の灯りはついておらず、勉強机のデスクライトのみが光っている。
勉強机に向かって2枚の原稿用紙に作文を書いている、蓮見瑠璃(10)。
瑠璃N「わたしの家族。4年1組、蓮見瑠璃」
壁に掛かったコルクボードにはたくさんの写真が飾られており、その中の一枚に瑠璃と、蓮見友仁(41)が釣りに行った時の親子写真がある。その隣には、病室のベッドの上で赤ん坊の瑠璃を抱いている、蓮見恵理(享年31)の写真。
瑠璃N「わたしのうちはパパとわたしの2人家族です。昔は3人家族でしたが、ママはわたしが生まれてすぐに病気で死んじゃって、2人家族になってしまいました」

○　同・和室(朝)
窓際に仏壇が設置されており、恵理の笑顔の遺影が飾られている。
瑠璃、仏壇に線香を供え、手を合わせている。
瑠璃N「だからママと会ったことはありませんが、写真で見るママはとっても綺麗なので、娘のわたしも将来美人になるはずです」

○　同・LDK(朝)
ポップアップトースターで2枚の食パンが焼かれている。
エプロン姿の友仁、フライパンで目玉焼きを焼いているが、油が跳ねて熱がっている。
友仁「あっち!」
瑠璃N「うちではママのかわりに、パパがご飯を作ります」
×　×　×
食卓に、トースト・目玉焼き・ウインナー・プチトマトがのったプレートが2つ並んでいる。
瑠璃が目玉焼きの裏面をチェックすると、若干裏が焦げている。
友仁、バツの悪そうな顔で、
友仁「ちょっと焦げてるくらいが一番美味いんだよ」
瑠璃N「だけどパパはぶきっちょなので、あんまり料理上手じゃありません」
×　×　×
瑠璃、食器洗いをしている。
瑠璃N「もちろんわたしもお手伝いします。ご飯を食べ終わった後の食器洗いはわたしの仕事です」
プレートを洗おうとするが、洗剤で手が滑ってプレートを取りこぼし、何度かキャッチしようとするが失敗して床に落としてしまう。
瑠璃N「パパと違ってわたしは器用なので、食器洗いもお手の物です」

○　マンション・エレベーター(朝)
鞄とゴミ袋を持っている友仁と、ランドセルを背負っている瑠璃。
エレベーターが開き、他の階の住人の老婆が乗り合わせてくる。
友仁「おはようございます」
老婆「おはようございます」
ぼーっとしている瑠璃。すると友仁が瑠璃を小突いて、
友仁「瑠璃」
瑠璃、はっとして、
瑠璃「おはようございます」
老婆「はい、おはようございます」
瑠璃N「パパは誰かに会ったら挨拶することとか、自分が使ったものをちゃんと片づけることとかにはとても厳しいです」

○　同・ゴミ捨て場(朝)
きっちりゴミの分別をしながら捨てている友仁と瑠璃。
瑠璃N「一見どうでもいいような小さなことでも、適当に済ませずにちゃんとすること

が大事だって、よくわたしに言ってきます」

○　小学校・正門前（朝）
　通学中の小学生の群れに、瑠璃の姿がある。
瑠璃Ｎ「だからわたしもパパみたいに、どんなことでもちゃんとできる人になりたいです」
　井ノ瀬花（10）、瑠璃の後ろから駆け寄ってきて、瑠璃のランドセルを軽く叩く。
花「瑠璃ちゃん、おはよー！」
瑠璃「花ちゃん、おはよう」
　瑠璃と花、並んで歩いていく。

タイトル『パパの恋人』

○　同・４年１組の教室（朝）
　教卓の前に立つ担任教諭の、浜野真子（29）。
真子「みなさん、先週宿題に出した作文は書き終わりましたか？　テーマは『家族』で、締め切りは今週の金曜日ですからね。忘れないように！」
生徒たち「はーい」
真子「前にも言った通り、特に上手な作文が書けた人には、再来週の授業参観で、みんなを代表して読み上げてもらいますからね」
　一瞬、瑠璃に目配せする。
真子「お父さんやお母さんにかっこいいところを見せたい人はぜひ頑張ってくださいね」
　瑠璃、どこか得意げな表情。
　×　×　×
　休み時間中の雑然とした教室内。
　瑠璃、次の授業の準備をしながら、隣の席の花と話している。
花「絶対瑠璃ちゃんだよね！　夏休みの宿題の読書感想文も、コンクールで賞とってたし！」
瑠璃「慢心するべからずなのだよ、花ちゃん」
　ゆっくりと教室内を見渡す。
　瑠璃の視線の先には、真剣に学習ドリルを解いている眼鏡の男子生徒、広瀬一樹（10）。
瑠璃「学年一の優等生で、国語のテストは毎回百点の一樹くん」
　友達と談笑している、外国人じみた顔立ちの女子生徒、金田リーサ（10）。
瑠璃「お父さんが日本人、お母さんがスウェーデン人の帰国子女、リーサちゃん」
　教室内で友達と追いかけっこをしているわんぱくそうな男子生徒、山田光太（10）。
瑠璃「十人兄弟の真ん中っ子で、テレビの取材も来るほどの大家族育ちの光太くん」
　視線を花に戻す。
瑠璃「同じクラスにこれだけの強敵がいるのに、ちょっと作文を書くのが得意なくらいで思い上がってたら足元すくわれちゃうよ。まあだからといって負ける気はないけどねー！」
　不敵な笑みを浮かべる瑠璃に、花はきょとんとした様子で、
花「瑠璃ちゃん、マンシンってどういう意味…？」

○　同・校舎外観
　放課後を告げるチャイムが鳴っている。

○　通学路
　帰宅中の子供たちの群れ。その中に瑠璃と花もいる。
　分かれ道に差し掛かり、別の道に分かれて帰る２人。
花「じゃあねー！」
瑠璃「バイバーイ」
　花と別れた瑠璃、まっすぐに歩き出す。
瑠璃Ｎ「パパは家のことだけじゃなく、仕事もしないといけないので大変です」

○　靴メーカー企業本社ビル・会議室
　上役を前に企画のプレゼンをしている友仁。
瑠璃Ｎ「パパは靴を作る会社で働いています。家ではぶきっちょなパパですが、意外にもお仕事は大得意なんだそうです」

○　市営図書館・外観
瑠璃Ｎ「パパがお仕事をしてる間は家に帰っても誰もいないので、わたしは毎日図書館で本を読んで過ごしています」

○　同・館内
　利用者もまばらな、静かな図書館内。
　瑠璃、集中して作文の続きを書いている。
瑠璃「（小声）たくさん本を読んだおかげで…この通り作文を書くのがとっても上手になりました…」
　瑠璃の正面の席に座る誰かが、瑠璃が気づくように机を指でトントンと叩く。
　瑠璃、視線を上げる。
瑠璃「（嬉しそうに）あっ」

正面に座っていた、長吉朔也(28)、笑顔で瑠璃を見ている。
以下、小声のやり取り。
瑠璃「さっくん！」
朔也「やっと気づいてくれた。宿題？」
瑠璃「授業参観で読む作文。家族のこと書くの」
朔也「じゃあ友仁さんのことだ」
文面を覗こうとするが、瑠璃が慌てて隠す。
瑠璃「まだだめ！ 完成したら読ませてあげる」
素直に身を引き、覗きをやめる。
朔也「友仁さん、今日どうしても遅くなりそうなんだって。だから今晩は俺と一緒に晩ごはん」
瑠璃「やった！」
瑠璃、意気揚々と原稿用紙と筆記用具をランドセルにしまう。

○ 蓮見家・瑠璃の部屋
コルクボードに飾られている写真の中に、瑠璃と友仁と朔也の３人が写っている写真がある。
瑠璃Ｎ「パパの帰りが遅くなる時は、パパの友達のさっくんが家に来てくれます」

○ スーパーマーケット(夕)
カートを押しながら野菜を吟味している朔也と、朔也についていく瑠璃。
瑠璃Ｎ「さっくんはパパと違ってすごく料理が上手で、お店で出てくるような美味しいご飯を作ってくれます」
× × ×
ケーキやプリンなどのスイーツ売り場に差し掛かり、つい目を奪われる瑠璃。
朔也、笑いながら、
朔也「好きなの一個選んでいいよ」
瑠璃「やった！」
瑠璃が目を輝かせてスイーツを物色している傍ら、朔也はプリンを１つ手に取ってカートに入れる。
瑠璃「これ！」
半ホールサイズのケーキを選び、カートに入れる。
朔也「ずる～っ！ それアリ！？」
瑠璃「一個は一個じゃん」
朔也「抜け目ないな～」
笑いながらカートを押す。
瑠璃Ｎ「さっくんはとても優しくて、わたしがわがままを言っても全然怒りません」

○ 蓮見家・ＬＤＫ(夜)
瑠璃と朔也、向かい合ってハヤシライスを食べている。その様子はとても楽しげ。
瑠璃Ｎ「わたしにとってさっくんは、もうひとりのパパみたいな存在です。作文のはじめに２人家族と書きましたが、本当のところは３人家族みたいなものなのです」
× × ×
出来上がった作文を読んでいる朔也。
朔也「…凄い。こんな素敵な作文、初めて読んだよ」
キッチンで食器を拭いている瑠璃、やけに不満げな表情。
瑠璃「いや～…なんかイマイチなんだよね」
朔也「そうなの？」
瑠璃「なんか盛り上がらないというか、展開がないというか…」
朔也、軽く吹き出して、
朔也「展開？ 俺が小学生の頃にそんなこと考えてる子、誰もいなかったよ」
瑠璃、食器拭きを終え、朔也のもとへ。
瑠璃「誰もいないからこそ、頭ひとつ飛び抜けるチャンスなんじゃん」
瑠璃に原稿用紙を返す。
玄関の方から扉が開く音と、友仁の声が聞こえてくる。
友仁の声「ただいまー」
朔也「友仁さんだ」
瑠璃より先に玄関に向かう。続いて瑠璃も朔也を追って玄関へ。

○ 同・玄関(夜)
疲れた様子の友仁、靴を脱いでいる。
ダイニングからやってきた瑠璃と朔也、友仁のもとへ。
瑠璃「おかえりー」
友仁「ただいま。(朔也に向かって)悪いな、また来てもらって」
朔也「いえいえ。お仕事、お疲れ様でした」
友仁、家に上がりながら部屋の匂いを嗅いで、
友仁「めっちゃいい匂いする…」
瑠璃「さっくんのハヤシライス、超おいしいよ！」
朔也「デザートのプリンもありますよ。友仁さんが好きな固めのやつ」

○ 同・瑠璃の部屋(夜)
パジャマ姿の瑠璃、デスクライトの灯り

のみを点けて、作文を読み返している。
瑠璃「う～～～ん…」
作文を放って、ベッドに仰向けに寝転がる。
瑠璃「展開…展開…」
頭を抱えて考え込む。
○　小学校・４年１組の教室(夢)
授業参観中の教室で、作文を持って席についている瑠璃。
真子「それでは、作文を読み上げてもらう人を発表します」
どこからかドラムロールが聞こえてくる。
期待に目を輝かせている瑠璃。
真子「１人めは…一樹くん！」
発表と同時に「ジャン！」という効果音が鳴る。
驚愕しながら一樹を見る瑠璃。
一樹は立ち上がると、瑠璃に向かってこれみよがしに眼鏡をくいっと上げる。
真子「２人めはリーサちゃん！」
リーサ、瑠璃をこれみよがしに見ながら立ち上がって、満面の笑み。
真子「最後に光太くんです！」
光太、両手を上げて立ち上がると、瑠璃の周囲をぐるぐると駆けまわる。
真子「残念ながら瑠璃ちゃんは落選です！」
一樹＆リーサ＆光太「(高笑い)」
瑠璃、激しくショックを受けている。
瑠璃「そんなぁ――――！」
○　蓮見家・瑠璃の部屋(夜)
眠ってしまっていた瑠璃、慌てて飛び起きる。
瑠璃「…サイアク…」
ベッドサイドの時計を手に取って見ると、時刻はまだ深夜。
瑠璃、深く溜息を吐いて再びベッドに横になる。
するとそこへ、うっすら友仁の声が聞こえてくる。
友仁の声「…もうその話はやめてくれ！」
瑠璃、友仁の声に気づき、再び起き上がる。
瑠璃「…？」
○　同・廊下(夜)
引き戸をゆっくり開け、廊下に出る瑠璃。
ＬＤＫから灯りが漏れているのが見える。
友仁の声「何度も言ってるだろ！ 俺にとって一番大切なのは瑠璃なんだ！」
瑠璃、こっそりとＬＤＫの方に歩み寄り、聞き耳を立てる。
○　同・ＬＤＫ(夜)
リビングのソファに腰かけている朔也と、ダイニングテーブルの傍に立つ友仁。２人の様子は真剣そのものである。
朔也「俺だってそうですよ。本気で瑠璃ちゃんのこと大切に思ってるんです」
友仁「…」
朔也「今日ね、瑠璃ちゃんが作文を読ませてくれたんです。『わたしの家族』ってタイトルの作文」
朔也の瞳はうっすら涙ぐんでいる。
朔也「そこにね、俺のこと書いてくれたんですよ。もうひとりのパパみたいな存在って…」
友仁「…」
朔也「それを見たら、生半可な気持ちでこの子に接することはできないなって」
友仁「…ごめん。俺がお前に甘えすぎたな。もう瑠璃のことで面倒はかけさせないから」
朔也、激昂して立ち上がり、友仁に迫る。
朔也「そういうことを言ってるんじゃないんだよ！ なんでわかんないかな、あんたは！」
友仁「そういうことだろ！ 今までだって…」
朔也、力強い手つきで友仁を抱きしめる。
友仁は驚きつつも、朔也を拒めないでいる。
朔也「好きです、友仁さん」
友仁「…！」
朔也「あなたのことがめちゃくちゃ好きで、あなたの家族になりたいんです」
友仁の顔を掴み、至近距離で目を合わせながら、
朔也「お願いですから、俺の人生をあなたと瑠璃ちゃんのために使わせてください」
友仁、沈黙したまま動けないでいる。
そこへ、廊下に続く扉の方から物音が聞こえ、友仁と朔也が驚いて振り向く。
扉が若干開いており、間から瑠璃が覗いているのが見える。
友仁「(唖然として)瑠璃…！」
動揺を隠せない２人。友仁、なんとか平静を装って、
友仁「こんな時間まで何してるんだ！ もう寝なさい！」
瑠璃、友仁の剣幕に驚きつつ、急いで自分の部屋へ帰る。

○　同・瑠璃の部屋（夜）
部屋の中へ戻ってきた瑠璃、引き戸を閉める。
瑠璃「…」
急いで勉強机に向かうと、鉛筆を取り出して原稿用紙に修正を加え始める。
「３人家族みたいなもの」の文の箇所の「みたいなもの」に線を引き、その上の「さっくん」の文字を丸で囲み、矢印を伸ばして「新しい家族！」と書き加える。
瑠璃、その原稿用紙を見ながら、大きくガッツポーズ。
瑠璃「勝ったーーーっ！」

○　小学校・外観
チャイムの音が鳴っている。

○　同・教室
真子、職員用デスクで連絡帳を見ていたが、その手を止めて、
真子「新しい紙？　いいわよ」
机の引き出しから新しい原稿用紙を１枚取り出し、瑠璃に渡す。
瑠璃「ありがとうございます！」
真子「いいえ。でも、なにに使うの？」
瑠璃「一回書いたけど、新しく書き直すんです。消しゴムで全部消してたら紙がぐちゃぐちゃになっちゃって」
真子、嬉しそうに、
真子「おーっ、気合入ってるわね！　これは傑作の予感がするな～」
瑠璃、得意げにほくそ笑みながら、
瑠璃「まあ乞うご期待ですね～」
真子、自分の机に戻っていく瑠璃の背中を見送りながら、瑠璃を囃し立てる。
真子「楽しみにしてますよーっ、瑠璃大先生！」

○　市営図書館・館内
瑠璃、真剣に作文を書いている。
一度自分で読み返して、
瑠璃「…違うな」
消しゴムで文面を消し、再び書き進めていく。
×　×　×
壁掛け時計は十七時五十五分を指しており、閉館を告げる蛍の光が流れている。
利用客が次々と出ていく中、瑠璃は作文に集中し続けている。

○　同・ロビー（夜）
図書館から出ていく利用客と入れ違いに、仕事終わりの友仁が図書館に入ってくる。
ロビーの掲示板にはパートナーシップ制度に関するポスターが貼られており、その前を通ろうとした友仁、目を取られて足を止める。
友仁「……」
はっと我に返り、瑠璃のいる館内へと急ぐ。

○　同・館内（夜）
友仁、館内にいる瑠璃を遠目に見つけるも、どこか悩ましい気な面持ちのまま近寄れずにいる。
友仁「……」
意を決し、瑠璃のもとへ。
友仁「瑠璃、お待たせ。帰るぞ」
瑠璃、作文を書く手を止め、辺りを見回して驚いている。
瑠璃「えっ、もうそんな時間？」
慌てて帰り支度をはじめる。
友仁「ずいぶん集中してたな。宿題か？」
瑠璃「後々のお楽しみ！」
ランドセルを背負い、慌ただしく図書館を出ていく。

○　国道（夜）
友仁が運転するグレーの普通自動車が国道を走っている。
瑠璃の声「ねえ、パパ」
友仁の声「ん？」

○　自動車内（夜）
運転席の友仁と、助手席の瑠璃が会話している。
瑠璃「さっくんとパパ、いつ結婚するの？」
友仁「はっ！？」
瑠璃「だってさっくんがうちの家族になるんだったら、パパかわたしのどっちかがさっくんと結婚しなきゃでしょ。わたしまだ子どもだし、じゃあパパなのかなって」
友仁、しどろもどろになってしまい、何も答えられない。
瑠璃「あれ、でもそうするとどっちがお嫁さんになるの？　やっぱりさっくん？」
友仁「結婚はしないよ！　日本じゃ男同士は結婚できないんだ」
瑠璃「そうなの？　じゃあどうやって家族になるの？」

友仁「いや、それは…」
ふと何かを考えるように黙り込む。
友仁「…なあ、瑠璃。もしも…もしもの話だけどな…」
言葉に詰まり、やがて押し黙る。
友仁「…やっぱりなんでもない」
瑠璃「…」
友仁「結婚だけが家族の形じゃないんだよ。お互いのことを心の底から大切にしてれば、それだって立派な家族だ」
瑠璃「じゃあパパは、さっくんのことが大切？」
友仁、しばしの沈黙を置いて、
友仁「…うん、すごく大切だよ」
瑠璃「なら、さっくんはもう家族だ！」
友仁「…ほら、もう家着くぞ」
瑠璃、どこか消化不良な様子。
以下、音声のみ前シーン先行で、
朔也の声「そんなこと言ってたんだ、友仁さん」

○　蓮見家・瑠璃の部屋（夜）
勉強机で作文と向かい合いながら、キッズスマホで朔也と電話で話している瑠璃。
瑠璃「そうなの。話すのヘタクソだよね、パパって」
朔也の声「あははは」
瑠璃「ねえ、さっくんはいつうちの家族になるの？」

○　長吉家・朔也の部屋（夜）
ファッションデザイン関係の本や資料で乱雑し、ｉＭａｃなどの機材が設置されているデスクの前で、ハンズフリーで電話している朔也。
朔也「…俺が家族になってもいいの？」
瑠璃の声「むしろなってくれなきゃ困るんだけど」
朔也、嬉しそうに笑う。
朔也「友仁さんがいいって言ってくれたら、すぐにでも」
瑠璃の声「ほんと？　じゃあパパにガツンと言っとくね！」
朔也「頼りにしてるよ。…それじゃあ、もう遅いから早く寝るんだよ。おやすみ」
瑠璃の声「はーい、おやすみー」
朔也、電話を切ると、思わず笑みがこぼれてくる。
朔也「…大切、かぁ」

○　蓮見家・和室（夜）
友仁、恵理の仏壇に線香を供える。
友仁「……」

○　病室（回想）
酷く弱弱しい痩せ細った姿でベッドに横たわる恵理。その傍らには友仁の姿がある。
恵理「もしかしたらあたしは、あんたにあの子を生んであげるために生まれてきたのかもね」
友仁に向かって微笑む。
恵理「トモ、瑠璃のことは任せたぞ」

○　蓮見家・和室（夜・回想明け）
友仁、遺影の恵理を見つめている。

○　小学校・４年１組の教室
瑠璃、真剣な様子で作文を書き進めている。
瑠璃「（小声）そんなわたしたちに…新しい家族が増えて…」
隣の席の花、瑠璃の作文を覗き込んで、
花「すごい、もうそんなに書けたの？」
瑠璃「まあこれぐらいはね～」
２人の様子を見ていた光太、ケラケラ笑いながら、
光太「瑠璃、まだ作文出してねーの？　俺もうとっくに出した！」
花「えっ、もう？　クラスで一番早いんじゃない？」
光太「兄ちゃんとか姉ちゃんとか、弟とか妹とかを全員紹介してったら、それだけでマス埋まったからそのまま出した！　あんなんテキトーでいけるじゃん！」
瑠璃、妙に真剣な表情で、
瑠璃「そう…学校の作文なんてね、テキトーに済まそうと思えば済ませちゃえるんだよ…。しかァし！」
椅子を倒しながら立ち上がる。
瑠璃「妥協、それすなわち死！　わたしはこの作文で、わたし史上最高傑作を作ってみせると決めたのだ～！　はーっはっはっはっは！」
やる気に満ち溢れている瑠璃を見て、花と光太は反応に困ってる。
光太「なんであいつ、あんなに作文にマジなの？」
花「瑠璃ちゃんは作文星人だからねぇ」

○　靴メーカー企業本社ビル・喫煙所

友仁、煙草片手にスマホの画面を見つめている。
画面には朔也のＬＩＮＥのアカウントが表示されており、電話するかどうか悩んでいることが伺える。
しかし電話をかけることはせず、煙草を深く吸い込む。
そこへ男性社員が喫煙所に駆け込んでくる。
社員「蓮見さん、来てもらっていいですか！生産ラインでトラブルがあったみたいで…」
友仁、慌ててスマホをスーツのポケットにしまい、
友仁「ちょっと待って、今行く」
煙草をもみ消してから喫煙所を出ていく。

○　蓮見家・ＬＤＫ（夜）
キッチンに立つ朔也、玉ねぎのみじん切りをしており、その隣で瑠璃がにんじんの皮むきをしている。
瑠璃「パパ、最近ずっと帰り遅いね」
朔也「仕方ないよ。友仁さんのこと、みんなが頼りにしてるから」
瑠璃「うそぉ？」
朔也「ほんとだよ。仕事してる時の友仁さん、そりゃもうカッコいいんだよ」
瑠璃「まあでも、パパがお仕事忙しいおかげで、さっくんのご飯食べられるもんね。早くこれが毎日になればいいのに」
朔也、嬉しそうに笑いつつも涙ぐんできて、手の甲で涙をぬぐう。
朔也「嬉しいこと言ってくれるじゃん。感動で涙でてきた」
瑠璃「いや、玉ねぎじゃん」
朔也、いたずらっぽく笑って、みじん切りを再開する。
朔也「バレたか～」
笑いあう２人。

○　同・瑠璃の部屋（夜）
勉強机の上に書き途中の作文や筆記用具が転がっており、ベッドでは瑠璃がすやすやと眠っている。

○　同・ＬＤＫ（夜）
ソファに腰かけてスマホをいじっている朔也。そこへ玄関扉をそっと開ける音が聞こえてきて、すぐに玄関へ向かう。

○　同・玄関（夜）
音を立てないように靴を脱いでいる友仁のもとへ、朔也が歩み寄る。
以下、小声でのやり取り。
朔也「おかえりなさい。大変だったみたいですね」
友仁「うん…急に呼びつけて悪い」

○　同・ＬＤＫ（夜）
朔也、上着を脱いでいる友仁を見つめながら、
朔也「瑠璃ちゃんは本当に真面目ないい子ですよね。俺が小学生の時なんか、宿題なんかひとつもやってこなかったですよ」
友仁、鞄から厚みのある封筒を取り出すと、神妙な面持ちで朔也に渡す。
友仁「朔也、これ」
朔也、不審そうに封筒を受け取り、中身を確認すると訝しげな表情を浮かべる。
朔也「…こんなに材料費かかってませんよ」
友仁「今までの礼。散々世話になったのに、ろくにできてなかったから」
朔也、友仁の思いを察する。
友仁は言葉に詰まりつつも、意を決して、
友仁「もうお前に面倒はかけさせないから。…これで終わりにしよう」
朔也、頭に血が上った様子だが、何とか平静を保つ。
朔也「…理由を聞かせてください」
友仁「お前を瑠璃の家族にはできない。どれだけ瑠璃がお前に懐いてて、お前が瑠璃のことを大切にしてくれたとしても」
朔也「そんなに世間の目が怖いですか？ 今更でしょう、俺が今まで何回、瑠璃ちゃんと一緒にこの家に帰ってきたと思います！？それこそすぐ近所のスーパーで一緒に買い物してるところだって、そこら中の人に見られてる！」
友仁「そのたびに俺は近所の人に、お前を親戚だってわざわざ説明してきたんだよ！」
朔也、友仁の胸ぐらを掴んで、
朔也「…あんたはどうなんですか？ 俺と別れて、本当にやっていけるんですか」
友仁「…馬鹿にするなよ！」
友仁、朔也の手を振りほどく。
友仁「俺が一番大切なのは瑠璃だ！ お前じゃない！」
朔也、友仁に何かを言おうとして、留まる。
受け取った封筒を友仁につっ返し、
朔也「…帰ります。また瑠璃ちゃんのこと、

起こすといけないですし」
足早にＬＤＫから出ていき、静かに玄関へ。
友仁、朔也を追うこともせず、そのまま立ち尽くす。

○　同・ベランダ（朝）
朝の陽ざしが差し込んできている。

○　同・ＬＤＫ（朝）
目玉焼きの乗ったトーストを食べている、瑠璃と友仁。
瑠璃「…また焦げてる」
友仁、どこか浮かない様子で、
友仁「…ごめん、失敗した」
瑠璃「さっくんなら絶対、目玉焼き焦がさないのに」
友仁「……」
瑠璃「さっくん、あれ作れるかな？　あの、エッグ…エッグなんとかみたい名前のやつ。今度お泊りしてもらってさ、朝ごはんに作ってもらおうよ」
友仁、言いにくそうにしつつも、
友仁「…瑠璃、朔也だけどな。今度からうちに来れないことになった」
瑠璃、驚く。
瑠璃「なんで？」
友仁「…色々、事情があるんだよ」
瑠璃「さっくん、うちの家族になるんじゃないの？」
友仁、動揺しつつも平静を装って、
友仁「…だめだよ。瑠璃の家族はパパだけで、朔也は違うんだ」
瑠璃、友仁の言葉にショックを受け、朝食を食べるのをやめて勢いよく立ち上がる。
瑠璃「ダメだよ、そんなの！　絶対にダメ！」
ＬＤＫから走って出ていき、自分の部屋に駆け込む。
友仁「瑠璃！」
瑠璃を追おうとするも足を止め、深く溜息を吐いて座り込んでしまう。
友仁「……」

○　同・瑠璃の部屋（朝）
瑠璃、書き途中の原稿用紙を広げ、苦悶の表情。
瑠璃「せっかくここまで書いたのに、さっくんが家族にならなかったら水の泡じゃんか～～～！」
原稿用紙を握りしめながら、壁に掛けられたカレンダーを見る。提出日の金曜日のところには赤文字で『〆切！』と書かれている。
瑠璃「明日には先生に出さなきゃならないのに～…！」

○　小学校・４年１組の教室
真子、デスクに荷物を置きながら、
真子「え？　また原稿用紙が欲しいの？」
瑠璃、しゅんとした面持ちで頷く。
瑠璃「また書き直さなきゃならないかもしれなくて…」
真子、瑠璃に原稿用紙を差し出しながら、
真子「提出、明日までよ。大丈夫？」
瑠璃、不安そうな様子。
真子「もし間に合わなさそうだったら、最初に書いたやつでも…」
瑠璃、真子の言葉で闘争心に火が付いた様子で、途端に強気な表情になる。
瑠璃「いーえっ！　納得いってない作文を出すくらいなら、出さないで失格になった方がマシです！　絶対に明日に間に合わせてみせます！」
真子から原稿用紙をひったくるように受け取ると、すぐさま自分の席へ。

○　靴メーカー企業本社ビル・企画営業部署
忙しなく働いている社員たちの中、自身のデスクで電話対応している友仁。
友仁「いえ、大事が無くてよかったです。はい、はい、それでは、失礼しますー…」
電話を切り、一息吐いて脱力。
隣の席の男性社員に向かって、
友仁「ちょっと煙草いってくる」
煙草のケースを手に取り、席を立つ。

○　同・喫煙所
友仁、喫煙所にやってくるなり、その場にいる人物を見て驚きの表情。
そこにいたのは、来客用の名札を首から下げた、朔也である。
朔也、友仁に気づき、
朔也「どうも」
友仁「…なんでいんだよ」
朔也「来季のコンペのデザインの件で、打ち合わせがあったんですよ」
友仁、喫煙所から出ていこうとするも、
朔也「煙草、１本くれません？」
空の煙草ケースを見せつける。

朔也「切らしちゃって」
友仁「……」
渋々戻ってきて、朔也に煙草を1本分ける。
朔也「ありがとうございます」
煙草に火を点け、一服する。
朔也「…吸わないんですか？」
友仁、躊躇いつつも、煙草を吸い始める。

○　小学校・4年1組の教室
休み時間中の教室。談笑したり、遊んでいる生徒に交じって、瑠璃と花は作文に取り組んでいる。
花「全然書けない～～～！」
鉛筆を放り出し、大きく伸びをする。
花「瑠璃ちゃん、作文ってどう書けばいいの？」
瑠璃「どうって…」
手を止めて考え込む。
瑠璃「…考えたことなかった。どうやって書いてんだろ？」
花「えーっ、あんなに作文上手なのに？」
瑠璃「なんだろう…。とりあえず書き始めれば、自然とできてこない？」
花「できてこないよー！」
花の机の横を、一樹が本を読みながら通る。
花「ねえ、一樹くん。作文ってどうやって書けばいいの？」
一樹、立ち止まると花のもとまでやってくる。
一樹「テーマについて自分が思うことを書けばいいんだよ」
花「テーマ？」
一樹「今回の作文のテーマは、家族についてでしょ。だから花さんのお父さんやお母さんがどんな人で、どういうところが好きかとか、そういうことを書くんだよ」
花、考え込んで、
花「うちのパパ、ずっと単身赴任してるからどんな人かわかんない…」
一樹「じゃあお母さんは？」
花「ママはあんまり家に帰ってこないから…」
一斉に場が静まり返る。
花「あ、でもおじいちゃんとおばあちゃんは優しい！」
一樹「じゃあそのことを書けばいいと思うよ」
花「わかった、ありがとう！」
花、ようやく作文を書き始める。
一樹、少しだけ勝ち誇ったようなしたり顔で、瑠璃に向かって、
一樹「ぼくは昨日書き終わったけど、瑠璃さんはまだなんだね」
瑠璃「！」
一樹、本を読むのを再開して、その場を去っていく。
瑠璃、悔しそうに地団太を踏みながら、
瑠璃「んもぉ～～～っ！　パパめぇ～～～！」

○　靴メーカー企業本社ビル・喫煙所
友仁、煙草の煙を吸い込んでむせる。
朔也「大丈夫ですか？」
友仁の背中を摩る。
友仁、朔也の対応に驚いて、慌てて周囲に誰かいないか確認する。
朔也「…ただ摩っただけですよ」
友仁「…悪い…」
朔也から距離を置く。
朔也「…頭、冷えました？」
友仁「は？」
朔也「昨日のことです。俺は頭冷やしてきましたよ」
朔也、友仁を真っ直ぐに見つめる。
朔也「お互いのことを心の底から大切にできれば、それだって立派な家族だ」
友仁「…！」
朔也「友仁さんがそう言ってたって、瑠璃ちゃんから聞きました」
煙草を灰皿に捨てると、友仁に詰め寄る。
友仁、朔也から逃げようと後ずさるが、次第に壁際に追い詰められ、壁ドンの体勢になる。
朔也「俺の目、ちゃんと見てください」
友仁「……」
頑なに朔也から目を逸らす。

○　小学校・4年1組の教室
頭を悩ませながら作文を書いている瑠璃のもとに、おずおずとリーサがやってくる。
リーサ「あの…瑠璃ちゃん…」
瑠璃「？」
手を止めてリーサを見上げる。
リーサ「ごめんね、急に…。わたしの作文、見てもらっていい？」
瑠璃「リーサちゃんの？」
リーサ「うん…。日本語間違ってないかどうか、不安で…」
不安そうな面持ちで原稿用紙を瑠璃に差し出す。
瑠璃、躊躇しつつも原稿用紙を受け取り、

目を通し始める。
冒頭の作者名のリーサの「ー」が、縦書きの原稿用紙に対して横書きで書かれている。
瑠璃「ここ！ 縦書きだから棒も立たせないと」
リーサ「あっ、そうか！」
瑠璃「リーサちゃん、日本語ペラペラなのに」
リーサ「書くのはまだ苦手なんだよね…。でも今回は絶対に、授業参観で作文読まれたいから」
瑠璃「リーサちゃんとこはママが来るの？」
リーサ「うん。いつもは仕事があるから授業参観とかめったに来ないんだけど、たまたまお休みになったから来てくれるんだ。だから、ママにいいところ見せたくて」
瑠璃、感心したようにリーサを見上げる。
瑠璃「リーサちゃん、えらい！ ハーフのアドバンテージに甘えてないね！」
リーサの作文を読むのを再開する。
リーサ「(怪訝そうに)アドバンテージ…？」
瑠璃が原稿用紙に目を通していると、「ママはスウエーデン人で名まえはイングリシトです」という一文が書かれているのを見つける。
瑠璃「リーサちゃんのママの名前、イングリシトっていうんだ。むずかしい名前だね」
リーサ「違うよ、ママの名前は Ingrid(イングリッド)！」
瑠璃、リーサの発音が良すぎて聞き取れず、きょとんとした表情。
瑠璃「え、なんて？」
リーサ「Ingrid」
瑠璃「イン…なに？」
リーサ「だから、Ingrid」

○ 靴メーカー企業本社ビル・喫煙所
朔也、友仁の持つ煙草を奪って、灰皿に捨てる。
壁ドンの体勢のまま、友仁を見つめる朔也と、朔也から目を逸らし続ける友仁。
朔也「…友仁さんにとって一番大切なのは瑠璃ちゃんなのはわかってます。でも本当は、俺のことも瑠璃ちゃんと同じくらい大切に思ってくれてるんですよね」
友仁「違う…」
朔也「じゃあなんで、瑠璃ちゃんにあんなこと言ったんですか」
友仁「……」
そこへ、遠くから人の笑い声が聞こえてきて、ハッとした友仁が慌てて喫煙所から出ていこうとする。
朔也、去ろうとする友仁の腕を掴むと、強引に引き寄せてキスをする。
友仁、驚きつつも朔也を拒むことができない。
人の声は段々と遠のいていき、完全に聞こえなくなったところで朔也が唇を離す。
朔也「…俺を見て、友仁さん」
友仁、恐る恐る朔也の目を見る。
真っ直ぐに友仁を見つめる、朔也の真剣な瞳。
友仁、朔也の瞳を見つめているうちに、段々と瞳が潤みだしてしまう。
朔也、たまらず友仁を抱きしめると、友仁は今にも泣きだしそうな震えた声を発する。
友仁「…なんで俺なんだよ…。こんなこぶ付きのくたびれたおっさん、好き好んで選ぶこたあないだろ…」
朔也、友仁の背中を摩りながら、
朔也「仕方ないでしょ。あんたのそのばか真面目なところが、俺は心底可愛いんですから」

○ 小学校・4年1組の教室
放課後のチャイムが鳴る教室内で、くしゃくしゃの原稿用紙を前に頭を悩ませている瑠璃。
瑠璃「人の面倒を見てる場合じゃなかった！」
隣の席の花、帰り支度を済ませた万全の状態で、心配そうに瑠璃を見ている。
花「ごめんね…。瑠璃ちゃん大変なのに、わたしの作文も見てもらっちゃって…」
瑠璃「いや、人のを見るのも好きだから大丈夫！」
渋々ランドセルを取り出し、帰り支度を始めようとする。
瑠璃「仕方ない、図書館でやるか…」
ランドセルに荷物をしまおうとして、ふとランドセルの中にあるキッズスマホの画面が光っていることに気づく。
瑠璃「？」
キッズスマホを取り出し、周囲に見られないように画面を確認する。
友仁(登録名はパパ)から「今日は仕事はやく終わったから、うちにまっすぐ帰っておいで」というメールが来ている。
瑠璃「めずらしー、もう帰ってきてるんだ」
教室内にいた光太、瑠璃がキッズスマホを使っていることを見つけて、指を差し

てはしゃぎだす。
光太「あー！ 瑠璃、学校でスマホ使ってるー！ 先生に言ってやろー！」
瑠璃、慌ててキッズスマホをランドセルの中に隠す。
瑠璃「光太くん、しーっ！」

○ 蓮見家・ＬＤＫ
お互い部屋着に着替えている友仁と朔也、ソファに隣り合って座っている。
友仁「…瑠璃が成人するまで待ってくれ」
朔也「……」
友仁「その頃には俺は五十歳で、お前が愛想を尽かすくらい見るも無惨なおっさんになってるかもしれない。それでもいいって言うんなら…」
朔也「当たり前でしょ。待ちますよ、それくらい」
友仁の手をそっと握る。
朔也「安心してください。そこそこ忍耐強いですし、何より老け専なんで」
友仁「…だろうな」
玄関の方から扉が開く音と、瑠璃の声が聞こえてくる。
瑠璃の声「ただいまー」
友仁と朔也、お互い顔を見合わせると、２人揃って玄関へ。

○ 同・玄関
靴を脱いでいる瑠璃、玄関にやってきた友仁と朔也に気が付く。
瑠璃「さっくん！」
慌てて靴を脱いで家にあがるものの、乱雑に脱ぎ捨てたので、靴がとっ散らかる。
友仁「瑠璃、靴は脱いだらどうするんだっけ」
瑠璃「あ、ごめんなさい」
瑠璃、靴をちゃんと揃えると、振り返りざまに、
瑠璃「さっくん来てるじゃん！」
朔也「うん、来てるよ」
瑠璃「だって、パパがもう来ないって！」
友仁、バツの悪そうな顔で、
友仁「事情が変わったんだよ…」
瑠璃「じゃあ、さっくんうちの家族になる！？」
友仁と朔也、顔を見合わせて、
友仁「あー…まあゆくゆくは…」
瑠璃の表情がパァーッと明るくなる。
瑠璃「やったーっ！」
その場でぴょんぴょんと飛び跳ねて喜ぶが、ふと我に返って、
瑠璃「ゆくゆくはっていつ？」
友仁「えっと…十年後くらい…かな…」
瑠璃「それ明日中にとかならない？」
朔也、小さく吹き出す。
友仁「ならない！ 色々あるんだよ、大人には！」
朔也「俺は全然、それでもいいですけど」
友仁「ならないっつーの！」
瑠璃、残念そうに肩を落として、急にぶつぶつと呟きだす。
瑠璃「(小声)うーん、嘘書くのはダメだし…。まあでも終わり方をちょっといじくれば、どうにか…」
友仁「なにぶつぶつ言ってるんだ？」
瑠璃、意気揚々とランドセルを背負いなおし、自分の部屋に向かいながら、
瑠璃「後々のお楽しみ！」
友仁と朔也、２人揃って怪訝そうな表情。
瑠璃Ｎ「わたしの家族。４年１組、蓮見瑠璃」

○ 同・和室(夜)
恵理の仏壇の前に瑠璃、友仁、朔也が並んで座っている。
神妙な顔で手を合わせる朔也。
瑠璃Ｎ「わたしのうちは初め、パパとママとわたしの３人家族でした。けれどママはわたしが生まれてすぐに病気で死んじゃって、パパとわたしの２人だけになってしまいました」

○ 同・ＬＤＫ(夜)
キッチンで隣り合って一緒にコロッケを揚げている友仁と朔也。跳ねる油に及び腰になる友仁を、朔也が笑いながら見ている。
瑠璃Ｎ「そんなわたしたちに新しい家族が増えて、また３人家族になる日が訪れようとしています」
× × ×
綺麗なきつね色のコロッケと、焦げたコロッケが大皿に混ぜこぜになっている。
笑いながらコロッケの写真を撮る瑠璃と朔也、不服そうな友仁。
瑠璃Ｎ「もちろん、ママが生き返ったのではありません。新しい家族はさっくんといって、パパの友達だった人です」
× × ×
食器洗いをする瑠璃と、瑠璃が洗った食器を拭く朔也。
瑠璃、朔也に大皿を渡そうとして手が滑

って落としかけるが、間一髪で朔也がそれをキャッチする。
ほっと一息つき、笑い合う2人。
瑠璃N「さっくんは料理上手で、優しくて、わたしにとってもうひとりのパパみたいな存在でした。けれどまさか、さっくんが本当のパパになる日が来るなんて、夢みたいです」

○　同・瑠璃の部屋(夜)
勉強机で作文を書いている途中に寝落ちしている瑠璃に、友仁が毛布をかける。
瑠璃N「ただパパが言うには、さっくんが本当にうちの家族になるのは、まだ先のことみたいです。だけどわたしは今すぐにでも、さっくんに家族になってほしいです」

○　同・ＬＤＫ(朝)
あくびをしながらダイニングにやってきた瑠璃、テーブルの上の朝食に気が付く。テーブルの上には3人分のエッグベネディクトが並んでいる。
目を輝かせて大はしゃぎしている瑠璃を、出勤の支度をしている友仁と、キッチンでコーヒーを淹れている朔也が笑いながら見ている。
瑠璃N「さっくんが家族になってくれれば、わたしは朝ごはんにパパが作った焦げた目玉焼きを食べずに済むので」

○　小学校・4年1組の教室
自信満々に真子にくしゃくしゃの原稿用紙を差し出す、体操着姿の瑠璃。
瑠璃「できました、最高傑作！」
真子、原稿用紙を受け取る。
真子「待ってましたよ～、瑠璃先生の新作！あとはもうちょっと綺麗な原稿用紙で提出できたら完璧なんだけどな～」
瑠璃、バツの悪そうな顔で、
瑠璃「途中から一回消して全部書き直したから…」
真子「うんうん、それじゃあこれも努力の証だ！さ、はやくしないと、次の授業に遅刻しちゃうわよ。今日からマラソン大会の練習ですからね～」
瑠璃、途端にげんなりとして、教室の入り口前で待っていた花と合流して教室を出ていく。
瑠璃「マラソンいやだ…この世で一番嫌い…」
花「わたしも～…」

真子、笑いながら瑠璃と花を見送り、瑠璃の作文に軽く目を通し始めるが、次第に深刻な表情になる。
真子「…！」
咄嗟に周囲を警戒すると、原稿用紙を折りたたんで教材とバインダーの間に隠す。
真子「……」

○　同・駐車場
営業車のもとに向かう友仁。
すると友仁のスマホに電話がかかってきて、足を止めて電話に出る。
友仁「はい、蓮見です」
真子の声「突然すみません。私、瑠璃ちゃんの担任の浜野です。今、お時間大丈夫でしょうか？」
友仁、心配そうに、
友仁「ええ、大丈夫ですけど…。瑠璃がどうかしましたか」
真子の声「いえ、その…。お父さんに、どうしてもお話したいことがありまして…」
友仁「…？」

○　小学校・外観(夕)

○　同・多目的教室(夕)
向かい合わせに置かれた机の片側に座る友仁、瑠璃の作文を読んでいる。
友仁「……」
その正面に座る真子、堰を切ったように頭を下げる。
真子「申し訳ありません！」
友仁、真子の反応に驚く。
友仁「いや、なんで先生が謝るんですか！」
真子「いえ、その…。こんなこと、軽はずみに立ち入るべきではないのに…」
友仁「先生は悪くないでしょう、うちの子が書いてきた作文を読んだだけなんだから」
真子、頭を上げる。
真子「あの…瑠璃ちゃんは、お父さんたちのことは…」
友仁「多分、あんまりちゃんとわかってないんでしょうね。わざわざ作文に書くぐらいだから」
原稿用紙を机の上に置くと、わざと明るく振舞うが、その笑顔は引きつっている。
友仁「いやあ…本当にすみませんね、先生！ビックリしたでしょう、生徒の父親…それもこんな普通のおっさんがゲイだなんていきなり知らされて」

真子「……」
友仁「世間一般のイメージとはかけ離れてるし、黙ってりゃわからないと思ってたんですがね。まさかこんな形でバレるとは、あはは…」
真子「お父さん、無理なさらなくても大丈夫です」
友仁の引きつった笑みが少しだけ和らぐ。
友仁「…本当にすみません。こんな個人的なことでご迷惑かけて…」
真子「…あの、お聞きしてもいいですか」
躊躇いつつも、意を決して切り出す。
真子「瑠璃ちゃんのお母さんは亡くなったと聞いているのですが…。その方とは…」
友仁「……」
真子、慌てた様子で、
真子「すみません！ 無神経すぎましたよね！」
友仁「いえ…。むしろよかったら、聞いていただけますか」
意を決したように語りだす。
しばしの沈黙が流れる。
友仁「恵里は…瑠璃の母親は、私の親友なんです」
真子「！」
友仁「籍こそ入れましたが、私も恵理もお互いをそういう風に思ったことは一度もありません」
真子「なら、どうして…」
友仁、どこか遠くを見つめながら、
友仁「…恵理とは小学校の同級生だったんです。私は両親を早くに亡くして、親戚をたらい回しにされて育って…。恵理の家はいわゆる、機能不全家族ってやつでした」

○　田舎のあぜ道（夕・回想）
２人並んで帰路についている、子供時代の友仁（8）と恵理（8）の寂しそうな表情。
恵理の姿は現在の瑠璃とそっくりである。
友仁Ｎ「だからかな…。恵理も私も、家族ってものに憧れがあった」

○　ゲイバー（回想）
青年期の友仁（20）、ガタイの良い男に腰を抱かれながら、カウンター席で談笑している。
友仁Ｎ「けど私はこの通り、普通に奥さんを貰って家庭を築いて…っていうのができなくて」

○　一軒家・寝室（回想）
全裸にタオルを巻いただけの恰好の恵理（20）、不倫相手の妻に暴力を振るわれており、不倫相手の男がそれを必死で止めている。
友仁Ｎ「恵理は恵理で、ろくでもない男に騙されてばっかりで。瑠璃の本当の父親は、瑠璃ができたことを知るなり恵理を捨てたんです」

○　診察室（回想）
コルポスコープ（膣拡大鏡）の写真を指しながら、恵理に病状の説明をする医師。
恵理は憮然とした表情で説明を聞いている。
友仁Ｎ「…おまけに恵理は、瑠璃を妊娠してる最中に癌が発覚して。治療のためには、瑠璃を諦めなきゃならないってなって…」

○　病室（夕・回想）
病室のベッドで、プレートにのった病院食を食べている恵理。その傍らには友仁の姿がある。
恵理「決めたよ、トモ」
友仁「何が？」
恵理「生まれてくる子供の名前は瑠璃にする。きっとあたし似の美人な子が生まれるぞ～」
友仁「……」
笑顔の恵理に対し、友仁は複雑そうな表情。
恵理、病院食をつつきながら、
恵理「あたし、プレートにのった朝ごはんに憧れてたんだよね。トーストと、目玉焼きと、ウインナーがのってるようなの。プチトマトもあったら完璧だな」
友仁「…うん」
恵理、友仁の手を力なく握って、微笑む。
恵理「ねえトモ、瑠璃のパパになってあげてよ」
友仁「…恵理」
恵理「それでさ、そういう朝ごはん、作ってあげて。ねっ、お願い」
友仁Ｎ「それでも恵理は、瑠璃を生むことを選んだ」

○　小学校・多目的教室（夕・回想明け）
真子、涙ぐんでいる。
友仁「俺はね…きっと一生、自分の子供を持てないだろうと思ってたんです。恵理はそんな俺に瑠璃を…家族を残してくれた。それでどれだけ俺が救われたか…」

真子「……」
　真子、ハンカチを取り出して涙を拭うと、原稿用紙を大切そうに手に取る。
真子「お父さん、私はこの作文を是非とも瑠璃ちゃんに読んでほしいと思っています」
友仁「……」
真子「瑠璃ちゃんの書く作文は本当に素晴らしいんです。テーマに沿って自分の考えを書くだけでも難しいのに、瑠璃ちゃんはそれに加えて、読む人を楽しませようとしている。これは間違いなく稀有な才能です」
　それまでの熱弁ぶりから一転、複雑そうな表情を浮かべて、語気が段々と沈んでいく。
真子「…ですがこの作文は、お父さんのプライバシーに関わります。それを他の保護者もいらっしゃる場で読み上げたりしたら…。…こんなことは考えたくもありませんが、これをきっかけに瑠璃ちゃんが他の子からいじめられたりする可能性も…」
友仁「……」
真子「すみません…。どうするべきなのか、私にはわかりません…」
　気まずい沈黙が漂う。

○　蓮見家・ＬＤＫ(夜)
　神妙な顔でソファに腰かけている友仁。その隣に座っている朔也、友仁の手を握りしめている。
朔也「…どうするんですか」
友仁「……」
　長い沈黙の後、友仁は穏やかな微笑みを浮かべる。
友仁「俺たちのこと、ちゃんと話すよ。全部わかってもらった上で、あの子のやりたいようにやらせる」
朔也「…それで友仁さんがゲイだってことがバレてもいいんですか」
友仁「俺にとって一番大切なのは瑠璃だ。瑠璃がよければ、それでいいんだよ」
　朔也、友仁を優しく抱きしめる。
朔也「もしも友仁さんが差別されたり、瑠璃ちゃんがいじめられるようなことがあったら、俺が全力で守ります」
　友仁、朔也を抱きしめ返す。
友仁「ありがとう、朔也」

○　同・瑠璃の部屋(夜)
　勉強机に向かって宿題をしている瑠璃のもとに、ノック音が聞こえてくる。
友仁の声「瑠璃、ちょっといいか？」
　瑠璃、振り返りながら、
瑠璃「なに？」
　扉が開き、友仁が顔を覗かせる。
友仁「話したいことがあるんだ。パパの部屋に来れるか？」
　瑠璃、きょとんとした表情。

○　同・和室(夜)
　仏壇のある和室に布団が２枚敷かれており、その布団の上に瑠璃が胡坐をかいて座っている。
　瑠璃の正面には友仁と朔也が並んで座っており、少し前かがみになって瑠璃に視線を合わせている。
瑠璃「じゃあ、さっくんはパパのなんなの？」
友仁「朔也は、パパの恋人だよ。でも、そのことは今まで秘密にしてきた」
瑠璃「なんで？」
　友仁、哀しげな表情で、
友仁「世の中には、男が男と恋人同士なことはおかしなことだって思ってる人が、大勢いるんだ。パパが朔也と恋人同士だって他の人が知ったら、パパのことを気持ち悪がったり、嫌がったりするかもしれない」
瑠璃「……」
友仁「…そういう人は、パパの娘の瑠璃のことも仲間外れにしたり、いじめたりするかもしれない」
　瑠璃、俯いて深く考え込む。
　緊張した面持ちで瑠璃の様子を見守る、友仁と朔也。
瑠璃「…それってさ」
　顔を上げた瑠璃の表情は、妙にワクワクとした様子である。
瑠璃「こういう風にすれば、いけるんじゃない？」

○　小学校・外観
　子供の話し声に混じって、大人の話し声が聞こえてくる。

○　同・４年１組の教室
　教室の後方に、授業参観にやってきた父兄たちが屯している。
　その中には、２人の赤ん坊を双子用抱っこ紐に抱えた光太の母(38)、美貌のスウェーデン人のリーサの母(32)、派手な格好をしたヤンママの一樹の母(28)がいる。
　瑠璃と花、自分の席から父兄たちを見物

している。
花「教室に女神がいる…」
花の視線の先には、他の父兄と談笑しているリーサの母。
花だけでなく、光太もリーサの母に見惚れている。
瑠璃、別の席のリーサに向かって、
瑠璃「リーサちゃんのママ、綺麗だね」
リーサ、照れくさそうに笑う。
リーサ「ママ、プロのモデルさんだから」
花「すごーい！」
瑠璃と花、再び視線を父兄たちに戻す。
瑠璃「あの人、誰のママだろう？」
瑠璃の視線の先には、光太の母が抱く双子にちょっかいを出している一樹の母。
光太の母は若干、一樹の母に怯えている。
いつの間にか瑠璃と花の席の近くに来ていた一樹、唐突に、
一樹「ぼくのお母さんだよ」
瑠璃と花、驚く。
花「意外！ なんかもっと真面目そうな感じだと思ってた」
瑠璃「ＰＴＡの会長とかやってるイメージあるよね」
一樹の母、瑠璃ら３人から見られているのに気づき、満面の笑みで手を振ってくる。
一樹、母に手を振り返しながら、
一樹「僕がクラスで一番頭がいいからって、それは偏見だよ」
花「偏見ってなに？」
一樹「知りもしないのに勝手に思い込むこと」
そのまま自分の席に戻っていく。
花、一樹に聞こえないように声を潜めながら、
花「一樹くん、怒ったのかな？」
瑠璃「わかんないけど、一樹くんは嫌だったのかも。あとで謝ろっか」
始業を告げるチャイムの音が響く。

○　同・階段
手押し車を持った花の祖母(85)が、手すりにつかまりながらゆっくりと階段を上がっていく。
そこへやってきたスーツ姿の友仁、花の祖母に気づいて駆け寄る。
友仁、老婆が持つ手押し車を指して、
友仁「おばあさん、それ持ちましょうか」
花の祖母「あら、どうもご親切に」
友仁、手押し車を持ち上げると、老婆に付き添ってゆっくりと階段を上る。
友仁「どこの教室に行かれるんですか？」
花の祖母「４年生の教室に行きたいんですよ。孫がいましてねぇ」

○　同・４年１組の教室
チャイムの音が鳴り、扉を開けて真子が教室内にやってくると、生徒たちが次々に立ち上がる。
一樹「きりーつ、れーい」
生徒たちがばらばらに一礼をする。
一樹「ちゃくせーき」
生徒たちが席に着く。
真子「はい、今日は待ちに待った授業参観の日です！ みんな、お父さんとお母さんに普段から一生懸命勉強しているところを見せてあげましょう」
そこへ扉が開く音がして、その場にいる全員が一斉に振り向く。
そこには手押し車を押す花の祖母と、友仁の姿が。
花「(小声)おばあちゃん！」
花の祖母「すみませんねぇ、遅くなっちゃって」
真子「いえいえ、まだ始まったばかりですから！ どうぞ中へ」
友仁と花の祖母、教室内へ入る。
花は祖母に向かって手を振り、瑠璃は特に気にする様子もなく、すぐに前へと向き直る。
真子「さて、今日は国語の授業です。まずは教科書の四十二ページを開きましょう」

○　同・廊下
教室から出て、ぐずり始めた赤ん坊をあやしている光太の母。
真子の声「…それではみんなお待ちかね、本日のメインイベント！」

○　同・４年１組の教室
黒板に授業内容が書き込まれており、授業が進んだことがわかる。
真子、教卓に手をついて、
真子「みんなには自分の家族についての作文を書いてきてもらいましたね。今日はその中から、特に素晴らしい作文が書けた代表者に、実際に作文を読み上げてもらいたいと思います」
友仁、緊張した面持ち。
一方、瑠璃はけろっとした様子で原稿用

紙を取り出す。
真子「ではまず1人目は、広瀬一樹くん！」
一樹の母、両手を突き上げてアロハポーズ。
一樹の母「うぇーい！一樹、やるぅ！」
一樹、母のリアクションには反応せず、原稿用紙を持って立ち上がる。
一樹「ぼくの家族。４年１組、広瀬一樹」
× × ×
作文を読み上げている一樹。
一樹「…お母さんは明るい色の洋服が大好きで、どんなに人がたくさんいてもすぐに見つけることができるので、ぼくは生まれてから一度も迷子になったことがありません…」
手を叩いて大爆笑している一樹の母。
× × ×
真子「続いて２人目は、金田リーサちゃん！」
× × ×
リーサ、緊張しつつも懸命に作文を読み上げる。
リーサ「…スウェーデンには夏至祭というお祭りがあって、その日が来るとママがベリーケーキを作ってくれるので、毎年みんな楽しみにしています…」
リーサの母、感動して涙ぐんでいる。
× × ×
真子「３人目は、山田光太くん！」
× × ×
光太、元気よくハキハキと作文を読み上げる。
光太「…去年の２月に弟の星と太陽が生まれて、１０人兄弟になりました。あと１人生まれればサッカーチームができるって兄ちゃんが言ってたので、早く次の兄弟が生まれてきてほしいです…」
照れ笑いを浮かべる光太の母。
× × ×
真子「最後に作文を読んでもらうのは、蓮見瑠璃ちゃん！」
瑠璃、すくっと立ち上がる。
友仁、少し強張った顔で瑠璃を見守っている。
瑠璃「わたしの家族。４年１組、蓮見瑠璃」
教室内の全員が見守る中、瑠璃が作文を読み進めていく。瑠璃の原稿用紙はシワ１つ無い綺麗な用紙である。
瑠璃「わたしのうちは初め、パパとママとわたしの３人家族でした。けれどママはわたしが生まれてすぐに病気で死んじゃって、パパとわたしの２人だけになってしまいました」
生徒たちは特段反応しないが、父兄たちは息をのむ。
瑠璃「だからママと会ったことはありませんが、写真で見るママはとっても綺麗なので、娘のわたしも将来美人になるはずです」
生徒たちからどっと笑い声、父兄たちの何人かがクスクスと笑い声をあげる。
瑠璃「うちではママのかわりに、パパがご飯を作ります。だけどパパはぶきっちょなので、あんまり料理上手じゃありません」
ようやく友仁の表情が和らぎ、恥ずかしそうな笑顔を浮かべる。
瑠璃「もちろんわたしもお手伝いします。ご飯を食べ終わった後の食器洗いはわたしの仕事です。パパと違ってわたしは器用なので、食器洗いもお手の物です」
友仁「嘘つけ！」
生徒と父兄の両方から一斉に笑い声が上がる。
瑠璃、いたずらっぽい笑顔で友仁をちらりと見て、すぐに作文を読むのを再開する。
瑠璃「ぶきっちょなパパとの２人暮らしは、なにかと苦労が絶えません。わたしは時々、もう１人くらい家族が欲しくなります。できれば料理が上手で、優しくて、パパとわたしのことを大切にしてくれる人がいいな、なんて思っていました」
友仁「……」
瑠璃「そして今、パパはわたしが想像していたような素敵な人と、家族になろうとしています」
一部の女子生徒、生徒の母親が、黄色い声をあげる。
瑠璃「今まで家族じゃなかった人と新しく家族になるのは、とても大変なことみたいです。パパはぶきっちょだから、きっと特に大変だと思います」
真子、涙ぐんでいるが泣くまいと堪えている。
瑠璃「だけど、パパはよくわたしにこう言います。『一見どうでもいいような小さなことでも、適当に済ませずにちゃんとすることが大事なんだよ』って。だからきっと、どんなに大変なことでも適当に済ませずに、ちゃんとやり遂げてくれるはずです」
友仁、感慨深げに瑠璃を見つめる。
瑠璃「その人がパパとわたしの家族になって

くれる日が、今からとても楽しみです。そうなればわたしは、毎朝パパが作った焦げた目玉焼きを食べずに済むので」
父兄たちに混じって、友仁が笑い出す。
瑠璃、原稿用紙を折りたたみ、席に着く。
生徒と父兄たちが瑠璃に向かって拍手を送る。
×　×　×
友仁、他の父兄たちに囲まれており、特に興奮した様子の一樹の母が友仁の肩をバシバシと叩いている。
一樹の母「むっっっちゃ感動した！ 瑠璃ちゃんパパ、マジ頑張ってね！ 子どもがいるうちに再婚とかなるとギャーギャー言ってくる奴とかいると思うけど、あたしバリ応援してっから！」
友仁「あはは、どうも…」
愛想笑いを浮かべながらも、恥ずかしくて堪らないという様子。
一方、瑠璃は花やリーサを含めた女子生徒から囲まれている。
女子Ａ「この人って、瑠璃ちゃんパパの彼女ってことだよね？」
瑠璃「まあ、パパの恋人だね」
女子Ｂ「キャー！ オトナの恋愛じゃん！」
２人の様子を、真子が複雑そうな笑みを浮かべながら見ている。

○　通学路
瑠璃と友仁、並んで歩いている。
友仁「あそこまでぶきっちょって言うことないだろ。みんなの前で恥ずかしかったぞ」
瑠璃「ぶきっちょじゃん。何百回と目玉焼き作ってるのに、絶対に焦がすし」
友仁「嘘を書くのはルール違反だなんて言ってたくせに、自分だけ器用ぶりやがって」
瑠璃「あれ、ナイスツッコミだったよ。さすがわたしのパパ！」
赤信号の横断歩道に差し掛かり、足を止める。
瑠璃「みんなさっくんのこと、女の人だと思ってたね。まあ名前も性別も書かなかったからね」
友仁「…うん」
瑠璃「こういうのね、叙述トリックっていうんだよ。前に読んだ小説でね、ずっと男の人だと思ってたキャラが実は女の人だったっていうのがあってね」
友仁「…瑠璃」
瑠璃「なに？」
友仁「最初に書いた作文、読ませてやれなくてごめんな」
瑠璃、友仁の言葉に驚いている。
友仁「あの作文も、すごくよく書けてたのにな」
哀しげな眼で遠くを見つめている、友仁の表情。
その友仁を見ていた瑠璃も、少しだけ哀しげな表情になるが、すぐに笑顔を浮かべる。
瑠璃「わたしが大人になってさ、今よりもっと良い作文が書けるようになったら、そのとき書かせてよ」
友仁「……」
瑠璃「読んだ人が、パパとさっくんのこと大好きになるような作文、いつか書いてあげるから」
友仁、あたたかな微笑みを浮かべて、瑠璃の頭をくしゃりと撫でる。
友仁「…俺、瑠璃のパパになれてよかった」
瑠璃、どこか誇らしげに笑う。

○　蓮見家・ＬＤＫ
４枚焼きの新しいポップアップトースターが設置されているキッチン。
キッチンに立つ朔也、昼食のオムライスを調理している。
そこへ玄関扉の開く音と共に、
瑠璃の声「ただいまー！」
友仁の声「ただいま」
帰宅してきた瑠璃と友仁がＬＤＫへ。
朔也、２人に振り返り、
朔也「おかえりなさい」
瑠璃、真っ先に朔也のもとへ駆けていく。
瑠璃「オムライスだー！ さっくんのオムライスが一番好き！」
はしゃぐ瑠璃を見て、友仁と朔也が優しい微笑みを浮かべる。
幸福そうな３人家族の光景。

ＥＮＤ